負けない きっと 乗り越える

栗原で生まれ、育ち、消費されるリンゴたち

リンゴの収穫時期を迎えた令和最初の10月。栗原市を台風19号が襲った。それは、堤防の決壊や住宅の浸水など、市内に大きなつめ跡を残した。その台風は、生産者が減少する市内のリンゴ産地にも、大きな被害を出した。

栗原市内最大のリンゴ産地、金成地区小堤でリンゴの生産をする、小野寺（おのでら） 聡（さとし）さんに話を聞いた。

一つ一つ色づき具合を確認しながらリンゴを収穫する小野寺さん

思い出の木倒れる

台風19号が過ぎた翌日、1本の電話が鳴りました。「マルバのリンゴが折れている」。リンゴを生産する近所の先輩からでした。急いで自分のリンゴ畑に行くと、幹を地面に横たえた大木が目の前に飛び込んできました。その木は、祖父の代から受け継ぐリンゴの老木。約80年前からここにあります。最近は、幹に空洞が見つかり、その負担を軽くするため、枝を支柱で支え、いたわりながら、育てていました。そのような中、赤く色づいたリンゴがたわわに実り、今年も頑張ってくれたと、感謝していたところでした。

これまで長い間、私たち家族に恵みを与えてくれた、思い出深いリンゴの木。「本当に長い間、ありがとう」。思わず目頭が熱くなりました。

ふと、折れたその木の下を見ると、無数のリンゴが落ち、その多くが傷ついていました。風雨で落下し、傷ついたリンゴは、農場全体で約2.5トン。すべて捨てるしかありませんでした。

栗原で共に歩む

年末のお歳暮シーズンを迎え、贈答用として完熟のふじだけをそろえた販売が続けられなくなりました。「すみません、実は先日の台風で」と、恐縮しながら、正直に被害の状況をお客さんに伝え、おわびしました。ところが、長年リンゴを買ってくれるお客さんから、意外な言葉が返ってきました。「傷のついたふじでも良いし、ふじ以外のリンゴでも良いから欲しい」と。それは、お客さんが私を応援してくれているものでした。本当にありがたく、温かい言葉でした。

お客さんは、率直に味の感想やアドバイスをくれることも多く、とても温かい存在です。お客さんからの「おいしい」の一言、これが本当にうれしく、励みになります。これからも、お客さんの声を大切にしながら、この栗原でリンゴを作っていきます。

笑顔の果実

栗原市内でリンゴが生産されるようになり約100年。今では完熟のふじなど、市内直売所で飛ぶように売れる人気のリンゴ。しかし、そこに到達するには、顧客を獲得するまでの粘り強い努力があった。また、支持されるリンゴを作り続けるため、お客さんの声を大切にしながら、ひたむきに打ち込む人がいる。

栗原で生まれ、栗原で育ち、栗原で消費されるリンゴたち。その木の下には、関わる人それぞれの笑顔が実っていた。

栗原は、小さなリンゴ産地。しかし、この産地はこれからも、どんな困難に直面しても、きっと乗り越え、笑顔の果実を実らせるだろう。

どうか、もう100年笑顔の果実が実り続けますように。

1　約80年前から栗原のリンゴ産地を見つめてきたリンゴの木。台風19号により幹が折れる被害が出た。

2　台風被害をまぬがれ収穫できた完熟のふじ。今年は品質が特に良く期待が高まっていた矢先の台風被害だった。